

アメリカ学会会報

— The American Studies Newsletter —

No.215

July 2024

アメリカ研究 48 年の個人史的回顧

川島正樹

今春南山大学を定年で辞し、11年の高校を含めた通算45年のフルタイム教員人生にピリオドを打った。いくつが頼まれた原稿の執筆予定はあるものの、非常勤授業担当の予定もなく、多分にアメリカ研究との縁は希薄になる。二人の恩師は既になく、鬼籍に入った親しい同業者や友人もいる。個人史を物語ることをご寛恕頂きたい。

今を去る48年前の1976年春、将来の職業としてジャーナリストを目指していた私は悩んだ末に史学科現代史専攻を選んだ。院生の先輩が催してくれた京都東山の料亭での新歓コンパの最後に学部3回生が各々の研究テーマを開陳させられた。用意がなかった私がとっさにアメリカ史と口にした理由は二つあった。まず初めて生で身近に接した今津見先生がとても魅力的な好人物に見えたこと、高校生生の折にブルーグラスの生演奏に触れて以来、アメリカ民衆音楽に魅了されていたからである。アメリカ史を選んだ学生は私ともう1人しかいなかった。今津先生が「君たちは5年ぶりのアメリカ史専攻だ」と歓喜されたが、先生の期待に応えられるかどうか不安になった。今津先生からは学友が羨むほどに可愛がられ激励されたが、私には恩に報いられないもどかしさが募った。

その1年前の春、最後に残った米軍部隊が当時のサイゴンから惨めな撤退を余儀なくされてベトナム戦争がようやく終わったが、反戦運動を概ね支持していた周囲の学友たちの間で、その後もずっと「反米」は常識だった。学生活動家だった友人には「なぜ君は敵の歴史の勉強なんかを専攻したんだ？」と率直に批判する者さえいた。

自主的な読書会を立ち上げ、何とか通算5年で卒業できた。留年が決まった1978年春にグレイハウンドの「アメリカパス」を購入して1カ月の全米長距離バスの旅を取行した。卒論テーマに選んだB・T・ワシントンのタスキギ校も訪れた。ニューヨークのホテルでは虎の子の1万円札が数枚入った財布をこどもあろうにスタッフに眼前で為す術もなく抜き取られ、サンフランシスコまで三日三晩飲まず食わずの旅を強いられた。帰国後間もなく「第二次石油危機」で不況が本格化し、電通と日航という人気企業が採用予定ゼロを発表した。私は50倍の

競争率だった第一志望のブロック紙から内定を得たが、迷った末に故郷千葉県の定時制高校の教員となった。奈良県で定時制高校の教員をしながら大学院生をしていた先輩がいた。勉強への未練が断ち切れなかった私は同じ道を歩もうと決意したのだが、この密かな目論見を富田虎男先生のご厚情で実行できるまで3年を要した。長男の出産を機に妻はシンクタンク助手を辞した。私は生活と仕事と勉強で忙殺された。富田先生からは研究の厳しさだけでなく、理想的な教師と父親の在り方を学んだ。

勤め先は旧社会党協会派系の千葉県高教組の拠点校で、教育公務員特例法第22条第2項で認められた校外研修権の行使として「本属長」の校長の公認を得て6年かけて博士課程を修了できた。修論と博士予備論文のテーマはB・T・ワシントンとマーカス・ガーヴィーだった。

短大が4年制大学に昇格するブーム下の1990年4月、椋山女学園大学に赴任し、2年後に三重大に転任して7年を過ごす間にフルブライト若手研究員に抜擢され、家族5人ボストン郊外で1年間の移民体験を持つことができた。その後南山大学へ移り、今春まで25年務めた。

南山大学ではアメリカ研究センター長として2007年に始まる五カ年計画の名古屋アメリカ研究夏期セミナー(NASSS)の主催を任された。自らの経験から、環太平洋諸国と国内から毎年20名程を招き、米国人講師と寝食を共にする国際院生セミナーも併せて企画し、内外の学術基金と地元企業から総額7500万円を集めた(5年間で外国から74名、国内から90名、計164名が参加)。

日英両語でプレゼンを重ね、当時のハンツ・ユルゲン・マルクス学長と共にトヨタやJR東海など地元有力企業回りに奔走した。母校に提出した博論の出版作業も重なった私の心身は限界に達し、間もなく障がい者手帳を発給され休職を余儀なくされた。その後何とか寛解して復職し、3名の博論指導も果たせたが、奇跡という外ない。

これまでお世話になった諸氏に深謝する次第である。

(南山大学名誉教授)

新会長挨拶

去る6月1日、2日に早稲田大学で開催された年次大会で会長に就任いたしました。甚だ心許ないところもごさいますが、今後2年間、会員の皆様の研究・教育活動に少しでも資することができるよう微力ながら尽力する所存です。

脱コロナと重なった前嶋前会長の任期中には、諸々の施策のなかでもとりわけ広報・電子化情報委員会、会務委員会を中心にサーバに深刻な脆弱性があったホームページが全面リニューアルされ、新サイトに移行したことは、海外在住会員の利便性という意味でもアメリカ学会の国際化に資する重要な一歩であったかと思えます。それに伴い、会員マイページの利用も可能となり、登録情報の変更、年会費納入状況の確認、また、年会費の支払い手続き等ができるようになりました。

他方、2000年代前半には約1,200名に及んだ会員数も1,000人を割り込み、コロナ禍の余波も重なって、年次大会などでも一抹の寂しさを感じられている会員の皆様もおられるかと拝察いたします。そうしたなかで、理事・評議員会、総会でもお知らせいたしましたとおり、来年はウィリアム・S・クラークの活動等、種々の意味でアメリカ合衆国との関連も深い北海道・札幌の地で年次大会が開催される予定です（於・北海道大学）。北海道大学では2020年に年次大会の開催が予定されておりましたが、ご記憶のとおり、新型コロナウイルス感染症の蔓延で中止となっておりました。地方開催という意味では、北九州市立大学での年次大会（2018年）以来、7年振りということになります。

さて、コロナ禍に伴う副次的効果で常務理事会や各種委員会の多く、また、年次大会に際しての分科会もオンラインで開催されるようになりました。そのこと自体は、移動に伴う疲労の軽減や経費削減という意味では大いに推奨すべきものかもしれません。一方、会員数の減少とあいまって、学会活動そのものが沈滞してしまう事態は避けるべきだと考えております。

その意味で若手会員への支援、具体的には海外渡航奨励金や留学中院生向けのASA、OHA両年次大会参加費用補助を継続・充実させ、新入会員にもメリットが実感できるような学会運営にも努めて参りたいと思います。また、広く社会に開かれた学会ということも重要かもしれません。振り返れば、その一環として、年報『アメリカ研究』にその時々注目されるテーマについて、座談会が掲載されるようになったのは52号（2018年）からで、初回のテーマは「トランプ政権下のアメリカ」でした。

あらためて述べるまでもなく、今秋11月にはそのテーマの焦点であったトランプ前大統領が候補となるであろう、世間一般も注目するアメリカ大統領選挙が実施されます。こうしたなかで、アメリカ史についての理解をゆるやかな前提としつつ、アメリカ合衆国に関心を抱く人文・社会科学のさまざまな分野の専門家が集う当学会の活動が円滑に運営できるよう、中野耕太郎、常山菜穂子両副会長ならびに常務理事の皆様の助力を得つつ、力を惜しまず邁進できればと考えております。つきましては、会員の皆様の学会活動への積極的なご参加、組織運営へのご支援、ご協力を衷心よりお願い申し上げます。

中嶋啓雄

2024-2025 年度役員一覧

会長

中嶋 啓雄（大阪大）

副会長

常山 菜穂子（慶応義塾大）清水博賞選考委員会委員長兼任
中野 耕太郎（東京大）中原伸之賞選考委員会委員長兼任

常務理事

渡邊 真理子（専修大）	会務委員会会務担当
梅川 健（東京大）	会務委員会会務担当
宮田 智之（帝京大）	会務委員会会務担当
松本 俊太（名城大）	会務委員会財務担当
菅（七戸） 美弥（東京学芸大）	年次大会企画担当
中垣 恒太郎（専修大）	年次大会企画担当
會澤 恒（北海道大）	年次大会企画担当
南 修平（専修大）	年報編集委員会
関口 洋平（フェリス女学院大）	国際委員会
二村 太郎（同志社大）	英文ジャーナル編集委員会
松井 孝太（杏林大）	広報・電子化情報委員会
橋川 健竜（東京大）	斎藤真賞選考委員会

理事（選挙選出）

麻生 享志（早稲田大）	有光 道生（慶応義塾大）	石原 剛（東京大）
石山 徳子（明治大）	和泉 真澄（同志社大）	板津 木綿子（東京大）
伊藤 裕子（亜細亜大）	大串 尚代（慶応義塾大）	岡山 裕（慶応義塾大）
奥田 暁代（慶応義塾大）	小田 悠生（中央大）	兼子 歩（明治大）
川口 悠子（法政大）	貴堂 嘉之（一橋大）	倉科 一希（同志社大）
坂下 史子（上智大）	菅（七戸）美弥（東京学芸大）	諏訪部 浩一（東京大）
舌津 智之（立教大）	土屋 和代（東京大）	常山 葉穂子（慶応義塾大）
中野 耕太郎（東京大）	西山 隆行（成蹊大）	新田 啓子（立教大）
橋川 健竜（東京大）	久野 愛（東京大）	松永 京子（広島大）
松原 宏之（立教大）	南川 文里（同志社大）	三牧 聖子（同志社大）
宮田 伊知郎（埼玉大）	矢口 祐人（東京大）	吉原 真里（ハワイ大）
渡辺 靖（慶応義塾大）		

理事（会長推薦）

會澤 恒（北海道大）	梅川 健（東京大）	関口 洋平（フェリス学院大）
中垣 恒太郎（専修大）	二村 太郎（同志社大）	松井 孝太（杏林大）
松本 俊太（名城大）	南 修平（専修大）	宮田 智之（帝京大）
渡邊 真理子（専修大）		

監事

大森 一輝（北海学園大）	佐藤 千登勢（筑波大）	杉山 直子（日本女子大）
--------------	-------------	--------------

第 59 回年次大会企画・報告募集のお知らせ

第 59 回年次大会は、2025 年 5 月末ないし 6 月上旬に、北海道大学で開催を予定しています。

つきましては自由論題報告と部会企画案を、下記の通り募集いたします。会員のみさまの応募をお待ちしております。また、分科会の継続ないし新規開催の申し込みも受け付けております。すべての応募はアメリカ学会ホームページの「お問い合わせ・応募」欄〈<https://www.jaas.gr.jp/outline/contact-us.html#contact>〉から、年次大会企画委員会あてに PDF ファイルにて、該当する件名 1) 自由論題；2) 部会；3) 分科会を明記し、各締切日までにお申し込みください。

1. 「自由論題報告申し込み」(締切日：2024 年 11 月 15 日)

I. 申し込み

1) 報告者氏名・所属；2) 報告タイトル；3) 報告内容（和文 1,500 字程度，英文 800 語程度）；4) キーワード 5 つを記載のこと。報告タイトル・内容は、発表演語に準ずることとします。報告内容は未発表のものとなります。すべての応募について審査を行い、結果は 1 月上旬までにお知らせいたします。なお、提出された報告内容については、受理後の変更はできません。

II. 応募資格

自由論題での報告は、海外在住者（下を参照）を除き、会員のみとします。非会員による申し込みは、締め切り日までに入会手続きを行っている場合のみ暫定的に受理し、入会が認められ、会費納入が確認された時点で正式受理とします。

* 自由論題報告は 2 年連続でできますが、3 年連続ではできません。

〈海外在住の非会員〉第 52 回年次大会より、海外在住者（国籍不問）は、非会員でも自由論題発表が一回にかぎり認められることになりました。ただし、報告にあたっては、大会参加費（8,000 円）の支払いが必要となります。支払方法については、報告が認められた際に通知いたします。なお、支払われた参加費は、いかなる理由においても返金いたしません。

III. 報告にあたり

報告決定者は 2025 年 5 月 10 日までに、フルペーパー（和文の場合は 8,000 字～12,000 字，英文の場合は 5,000～7,500 words 程度）を提出していただきます。提出されたペーパーはパスワード化し、学会ホームページにて学会員のみ閲覧・ダウンロードできるようにいたします。

2. 「部会の企画提案」(締切日：2024 年 9 月 10 日)

- I. 申し込み
1) すべての登壇予定者氏名・所属（責任者を明記）；2) 部会タイトル；3) 内容（和文 800 字程度，英文 400 語程度）。報告タイトル・内容は，発表言語に準ずることとします。企画内容は未発表のものとしします。すべての応募について審査を行い，結果は 12 月下旬を目処にお知らせいたします。なお，提出された企画案については，受理後の変更はできません。
- II. 応募資格
1) 前回大会での部会・シンポジウム・ワークショップでの登壇者は，次年度での部会報告はできません。司会者，討論者としての応募も避けるようにしてください。
2) 登壇者の過半数は学会員であることとします。
3) 司会担当者は，学会員としてください。他の登壇者への連絡等をお願いするためです。
4) 非会員の部会登壇者への謝金，交通費等の支払いは，学会としては行いません。必要な場合には，科研費等をご使用ください。
5) 登壇者を選定するにあたっては，地域バランス・ジェンダー構成等にご配慮ください。
6) 学際性のある企画を歓迎いたします。ただし応募条件ではありません。
7) 大学院生や学位取得後間もない研究者の応募を歓迎いたします。
- III. 報告にあたり
登壇決定者は 2025 年 3 月 31 日までに，報告要旨（和文の場合は 600 字～800 字，英文の場合は 300～400 words 程度）を提出していただきます。提出されたペーパーは，学会ホームページにて一般閲覧・ダウンロードできるようにいたします。
3. 「分科会開催の申し込み」（締切日：2024 年 8 月 31 日）
分科会については，2024 年度もオンライン開催とさせていただきます。使用するウェブ会議サービス（ズーム等）については，原則各分科会でご用意いただくことをお願いいたします。
- I. 申し込み
新規申し込み：1) 分科会趣旨（和文 350～400 字）；2) 責任者氏名・所属・連絡先（メールアドレス）；3) 賛同者氏名・所属（5 名）
継続申し込み：1) 継続趣旨（和文 100～200 字）；2) 責任者氏名・所属・連絡先（メールアドレス）
開催可否については，12 月下旬を目処にお知らせいたします。
- II. 開催にあたり
開催が認められた分科会については，2025 年 2 月 15 日までに，企画提出依頼書（書式あり，後日送付）にて，1) 分科会の内容（報告タイトル等・日英両言語にて記載）；2) 報告者氏名・所属（日英両言語）；3) 内容紹介/報告要旨（300～400 字程度，使用言語のみ）；4) 開催予定日（ただし，年次大会プログラムと重ならないようにお願いいたします）；5) 使用するウェブ会議サービス（ズーム等）のセッション ID をお知らせいただきます。
年次大会企画委員会

Call for Proposals: Independent Paper Sessions The 59th Annual Conference of the Japanese Association for American Studies

The 59th JAAS Annual Meeting will be held at Hokkaido University in Sapporo in late May or early June 2025. The Program Coordinating Committee invites proposals for the “Independent Paper Sessions” to be held on the first day, Saturday.

Submission:

Submit your proposal (PDF) that includes: 1) your name and affiliation; 2) the title; 3) the abstract (approximately 800 words); 4) five keywords, via the following section of the American Studies Association website.

<https://www.jaas.gr.jp/outline/contact-us.html#contact>

Deadline: November 15, 2024.

Acceptance and decline emails will be sent in early January.

Proposal from Japan:

JAAS members are eligible for submission. Non-members wishing to submit proposals are asked to complete the membership application upon submission.

Proposal from outside Japan:

Submissions from both JAAS members and non-members are reviewed. Upon acceptance, non-members are asked to make the conference registration by e-mail no later than March 1, 2025. Also, the 8,000 JPY registration fee (non-refundable) should be paid at the venue prior to the presentation.

* Non-members living outside Japan may present papers once without becoming formal members of the JAAS. From the second time on, you are asked to become a member before presenting a paper. You can apply for the membership upon submission.

** You can present papers for two consecutive years, but not three years in a row.

*** All the submissions should be previously unpublished and should not be under consideration for publication elsewhere. The committee accepts proposals in English and Japanese.

**** When your proposal is accepted, you will be asked to submit the full paper (approximately 5,000 to 7,500 words in English, 8,000 to 12,000 letters in Japanese) to the Committee no later than May 10, 2025. The paper, locked with the password, will be posted on the JAAS website for the members prior to the Annual Meeting.

The JAAS Annual Meeting Program Coordinating Committee

アメリカ学会 2023 年度事業報告

1. 会員数

学会運営の適正化と経費節減のため、内規第 I 条 3 項「年会費を 3 年間滞納すると退会処分となる」に照らして 8 名を除名した。それに伴い 2024 年 3 月 31 日現在の会員数は 995 名（一般会員 888 名、院生会員 83 名、海外会員 9 名、名誉会員 4 名、維持会員 11 社）となり、前年度末より 24 名減少した。異動内訳は以下の通り。

〔前年度末 1,019 名〕*

新入会員 23 名（一般 10 名、院生 12 名、維持 0 社、海外 1 名）

退会員 47 名（除名 8 名、逝去 2 名、希望退会 36 名、2022 年度末遡り退会 1 名）

* 会員移動の確定時期が異なるため、前年度末の集計数を記載。

2. 理事・監事の改選

2024 年 2 月 13 日を締め切りとして理事・監事選挙を実施し、小田悠生・宮田智之両会員の立ち会いのもと 2 月 25 日に開票した。投票総数は 143 票となり、集計の結果、理事については上位 34 名が選出され、監事についても得票順に 3 名を決定した。

3. 会務委員会

2023 年 9 月にアメリカ学会会員情報システム（「JAAS マイページ」）を開設した。マイページを通して、会員は自身の登録情報を更新できるとともに、クレジットカードによる会費納入にも対応できるようになった。

また、東京大学が保管していた過去の年次大会の録音テープ（1982 年～2009 年）を本学会が引き取り管理することになった。本学会の貴重な音声アーカイブではあるが、著作権の問題等を解決する必要があるため、今後の利用については慎重に進めることとした。

4. 年次大会企画委員会

(1) 2024 年度年次大会（第 58 回）の開催

2024 年度年次大会（第 58 回）は、6 月 1～2 日に早稲田大学にて開催した。開催にあたっては、アメリカ研究振興会から財政的支援を受けた。

(2) 2025 年度年次大会（第 59 回）の準備

2025 年度年次大会（第 59 回）は、北海道大学にて開催予定である。

(3) 2024 年度年次大会旅費補助について

2024 年度年次大会の旅費補助金 2 万 5000 円を 4 名に支給した。

5. 年報編集委員会

2023 年度は、年報『アメリカ研究』第 58 号（特集テーマは、「アメリカと権威主義」）を刊行した。『アメリカ学会

会報』は、例年と同様、3つの号（212, 213, 214号）を発行した。

6. 英文ジャーナル編集委員会

現在刊行の最終段階にある“Voices”を特集テーマにした第35号には6本の論文が掲載される予定である。第36号の特集テーマは“New Approaches in American Studies”であり、投稿論文の査読を開始している。

7. 清水博賞選考委員会

第29回清水博賞は「受賞作なし」という結果となった。

8. 斎藤眞賞選考委員会

第8回斎藤眞賞を2名に授与した。

9. 中原伸之賞選考委員会

第5回中原伸之賞を1名に授与した。

10. 広報・電子化情報委員会

学会ウェブサイトの全面リニューアルに伴い、掲載内容の情報更新に努めるとともに、「お問い合わせ・応募」フォームやマイページを新設するなどウェブサイトの機能向上を図った。また、会員メーリングリストの管理運営に努め、システムのセキュリティ対策にも尽力した。

11. 国際委員会

(1) 2023年度行事（2023年6月4日～2024年6月1日）について

- ① 2023年・第57回JAAS年次大会（2023年6月3日～4日、専修大学）にて、American Studies Association（ASA）との共催ワークショップ“Transnational Contact and Human Mobility,” Organization of American Historians（OAH）との共催ワークショップ“Liberty and Equality in Early America”を実施した。
- ② ASAとの共同プロジェクトとして、プロセミナーを2023年6月5日（立教大学、ホスト：松原宏之会員）と6月9日（立命館大学、ホスト：坂下史子会員）に開催した。

(2) アメリカ学会海外渡航奨励金

2023年度前期募集において、1名に15万円を給付した。
2023年度後期募集において、1名に15万円を給付した。

(3) 2023年ASA年次大会への委員派遣、日米友好基金の大学院生補助給付

2023年ASA年次大会は、2023年11月2日～6日、モントリオールで開催された。国際委員会から、関口洋平委員長（フェリス学院大学）と小田悠生委員（中央大学）とが出張し、ASAとの会議を行った。日米友好基金による、留学中院生向けの大会参加費用補助金を5名に支給した。

(4) 2024年・第58回JAAS年次大会ワークショップの決定

2024年・第58回JAAS年次大会（2023年6月1日～2日、早稲田大学）にて、ASAとの共催ワークショップ“Climate Change, ‘Natural’ Disaster, and Global Unrest”, OAHとの共催ワークショップ“Human Rights, Secrecy, and Cultural Diplomacy in Twentieth-Century America”を設けることを決定した。また、ASAK（The American Studies Association of Korea）会長講演、“Toni Morrison’s *Home* and the Cold War: Reconfiguring American Studies”を行うことを決定した。

(5) 日米友好基金給付金による、ASAからの2024年JAAS年次大会招聘研究者

2024年JAAS年次大会への招聘研究者をIyko Day氏（Mount Holyoke College）とJulie Sze氏（University of California at Davis）とすることを決定した。両氏は、（上記（4））JAAS-ASA共催ワークショップ“Climate Change, ‘Natural’ Disaster, and Global Unrest”で報告を行う。

(6) ASAからの招聘者（上記（5））によるプロセミナー

ASAとの共催によるプロセミナーを、京都大学（ホスト：森口（土屋）由香会員）にて2024年6月5日に開催することを決定した。

(7) 日米友好基金給付金による、OAH研究者短期滞在プログラムのゲスト研究者

① 2023年度OAH短期滞在プログラムの実施

Jennifer Dorsey氏（Siena College）が、愛知県立大学（ホスト：久田由佳子会員、期間：2023年6月1日～6月16日）に、Jane Kamensky氏（Harvard University）が明治大学（ホスト：兼子歩会員・鰐淵秀一会員、期間：

同6月2日～6月18日)に滞在した。

② 2024年度 OAH 短期滞在プログラムの決定

共立女子大学(ホスト:佐原彩子会員, 期間:2024年5月24日～6月8日)に, Carl Bon Tempo氏(SUNY at Albany), 京都外国語大学(ホスト:佐々木豊会員, 期間:同5月24日～6月11日)に Sam Lebovic氏(George Mason University)が滞在することが決定した。両氏は, ホスト校企画による複数回の講演のほか, 2024年・第58回 JAAS 年次大会ワークショップ“Human Rights, Secrecy, and Cultural Diplomacy in Twentieth-Century America”(上記(4))で報告を行う。

(8) 2024年 OAH 年次大会での共催パネル開催, 委員派遣, 日米友好基金の大学院生補助給付

2024年 OAH 年次大会は, 2024年4月11日～4月14日, ニューオーリンズで開催された。JAAS-OAH 共催パネルを3つ設け, 久田由佳子会員(愛知県立大学), 南修平会員(専修大学), 野口久美子会員(明治学院大学), 水谷裕佳会員(上智大学)が報告を行った。国際委員会からは, 竹林修一委員(東北大学)が出張し, OAH との会議を行った。日米友好基金による, 留学中の大学院生のための会参加費用補助金を3名に支給した。

(9) American Studies Association of Korea (ASAK) からの, 2024年 JAAS 年次大会招聘研究者

2024年 JAAS 年次大会に, Jee Hyun An氏(Seoul National University)が参加することが決定した。同氏は, ASAK 会長講演(上記(4))を行う。

(10) 2023年・第56回 ASAK 大会への会員派遣

第56回 ASAK 大会(隔年開催)は, 2023年10月20日～21日, Kyung Hee University /慶熙大学校(ソウル市)で開催された。JAAS 代表として, 前嶋和弘会長(上智大学)と中村理香会員(成城大学)が参加し, 講演・報告を行った。

(11) 2025年 OAH 年次大会での共催ワークショップ

2025年 OAH 年次大会は, 2025年4月3日～6日, シカゴで開催予定である。

JAAS-OAH 共催ワークショップを2つ設けることを決定した。

(12) 2025年 OAH 研究者短期滞在プログラム(2025年6月上旬来日)のホスト校の決定

2025年ホスト校は, 白百合女子大学(ホスト:箕輪理美会員), 同志社大学(ホスト:和泉真澄会員, 南川文里会員)に決定した。

(13) 2025年・第59回 JAAS 年次大会における ASA との共催ワークショップの決定

2025年・第59回 JAAS 年次大会(2025年, 北海道大学)で, ワークショップ“Media, Activism, and Democracy”を ASA と共催することを決定した。

(14) 2024年 ASA 年次大会における ASA との共催パネルの決定

2024年の ASA 年次大会(2024年11月14日～11月17日, ボルティモア)において, ASA との共催パネルを行うことが決定した。

~~~~~  
**会員みなさまにお願い**

ご住所・所属等の変更が生じた場合には, 速やかに事務局 (office@jaas.gr.jp) までお知らせください。また, メールアドレスを登録されていない方は, 極力ご登録くださいますようお願いいたします。

## 2023 年度決算及び 2024 年度予算

総会において 2023 年度決算及び 2024 年度予算についてご承認をいただきました。ここに決算及び予算を掲載し、会員各位へのご報告とさせていただきます。なお、2023 年度の決算は、出納帳その他の関係書類とあわせて、大類久恵、小塩和人各監事の監査を受け、適切と認める旨の監査報告書が提出されていることをご報告いたします。

(財務担当 板津木綿子)

### アメリカ学会 2023 年度決算案

| □収入の部           |               | (単位：円)        |  |
|-----------------|---------------|---------------|--|
| 科 目             | 2023 年度予算 (a) | 2023 年度決算 (b) |  |
| 1. 年会費          | 8,400,000     | 8,138,000     |  |
| 2. 雑収入          | 400,000       | 612,731       |  |
| 3. 広告収入         | 30,000        | 0             |  |
| 4. 寄付金          | 0             | 0             |  |
| 5. アメリカ研究振興会助成金 | 1,000,000     | 1,000,000     |  |
| 6. 日米友好基金 (OAH) | 2,600,000     | 2,619,513     |  |
| 7. 日米友好基金 (ASA) | 650,000       | 652,765       |  |
| 小 計 (A)         | 13,080,000    | 13,023,009    |  |

### □支出の部

| 科 目              | 2023 年度予算 (a) | 2023 年度決算 (b) |  |
|------------------|---------------|---------------|--|
| 1. 会計費           | 4,530,000     | 4,319,568     |  |
| 01) 事務局人件費       | 650,000       | 600,000       |  |
| 02) 業務委託費        | 1,700,000     | 2,230,635     |  |
| 03) 常務理事会費       | 300,000       | 115,416       |  |
| 04) 会費郵送通信費      | 130,000       | 181,221       |  |
| 05) 事務用品費        | 100,000       | 153,574       |  |
| 06) 広報・電子化情報委員会費 | 700,000       | 697,815       |  |
| 07) 選挙関連費        | 0             | 59,488        |  |
| 08) 口座振替・郵便振替手数料 | 150,000       | 114,581       |  |
| 09) 会務雑費         | 800,000       | 166,838       |  |
| 2. 研究事業費         | 9,790,000     | 7,769,407     |  |
| 01) 年次大会費        | 300,000       | 338,556       |  |
| (1) 大会費          | 300,000       | 313,556       |  |
| (2) 企画委員会費       | 0             | 0             |  |
| (3) 非定職者旅費補助     | 0             | 25,000        |  |
| 02) 国際交流費        | 4,140,000     | 3,987,405     |  |
| (1) 国際交流活動費      | 500,000       | 334,875       |  |
| (2) OAH 短期滞在     | 1,850,000     | 2,000,000     |  |
| (3) ASA 年次大会派遣   | 700,000       | 700,000       |  |
| (4) ASAK 年次大会招聘  | 80,000        | 80,000        |  |
| (5) ASAK 大会派遣    | 160,000       | 172,530       |  |
| (6) OAH 年次大会派遣   | 350,000       | 400,000       |  |
| (7) 海外渡航奨励金      | 500,000       | 300,000       |  |
| 03) 年報刊行費        | 1,850,000     | 1,442,729     |  |
| (1) 年報編集委員会費     | 200,000       | 65,335        |  |
| (2) 年報印刷費        | 1,200,000     | 1,026,443     |  |
| (3) 年報郵送通信費・雑費   | 300,000       | 267,076       |  |
| (4) JSTAGE 公開費   | 150,000       | 83,875        |  |
| 04) 英文ジャーナル刊行費   | 1,950,000     | 1,238,266     |  |
| (1) 英文編集委員会費     | 200,000       | 20,000        |  |
| (2) 英文印刷費        | 1,000,000     | 669,614       |  |
| (3) 英文郵送通信費・雑費   | 150,000       | 143,652       |  |
| (4) コピーエディター雑費   | 600,000       | 405,000       |  |
| 05) 会報刊行費        | 700,000       | 539,506       |  |
| (1) 会報印刷費        | 300,000       | 284,296       |  |
| (2) 会報郵送通信費      | 400,000       | 255,210       |  |
| 06) 清水博賞委員会費     | 300,000       | 169,190       |  |
| 07) 斎藤眞賞委員会費     | 150,000       | 0             |  |
| 08) 中原伸之賞委員会費    | 150,000       | 53,755        |  |
| 09) 研究教育支援費      | 150,000       | 0             |  |
| 10) 研究事業予備費      | 100,000       | 0             |  |
| 小計 (B)           | 14,320,000    | 12,088,975    |  |

|               |             |            |
|---------------|-------------|------------|
| 当期収支差額 (A-B)  | ▲ 1,240,000 | 934,034    |
| 前期繰越金 (C)     | 23,090,496  | 23,090,496 |
| 次期繰越金 (A-B+C) | 21,850,496  | 24,024,530 |

### アメリカ学会 2024 年度予算

| □収入の部           |               | (単位：円) |
|-----------------|---------------|--------|
| 科 目             | 2024 年度予算 (a) |        |
| 1. 年会費          | 8,400,000     |        |
| 2. 雑収入          | 400,000       |        |
| 3. 広告収入         | 30,000        |        |
| 4. 寄付金          | 0             |        |
| 5. アメリカ研究振興会助成金 | 1,000,000     |        |
| 6. 日米友好基金 (OAH) | 2,970,000     |        |
| 7. 日米友好基金 (ASA) | 650,000       |        |
| 小 計 (A)         | 13,450,000    |        |

### □支出の部

| 科 目              | 2024 年度予算 (a) |  |
|------------------|---------------|--|
| 1. 会計費           | 4,130,000     |  |
| 01) 事務局人件費       | 650,000       |  |
| 02) 業務委託費        | 2,200,000     |  |
| 03) 常務理事会費       | 300,000       |  |
| 04) 会費郵送通信費      | 130,000       |  |
| 05) 事務用品費        | 100,000       |  |
| 06) 広報・電子化情報委員会費 | 500,000       |  |
| 07) 選挙関連費        | 0             |  |
| 08) 口座振替・郵便振替手数料 | 150,000       |  |
| 09) 会務雑費         | 100,000       |  |
| 2. 研究事業費         | 10,370,000    |  |
| 01) 年次大会費        | 300,000       |  |
| (1) 大会費          | 300,000       |  |
| (2) 企画委員会費       | 0             |  |
| (3) 非定職者旅費補助     | 0             |  |
| 02) 国際交流費        | 4,720,000     |  |
| (1) 国際交流活動費      | 500,000       |  |
| (2) OAH 短期滞在     | 2,400,000     |  |
| (3) ASA 年次大会派遣   | 800,000       |  |
| (4) ASAK 年次大会招聘  | 80,000        |  |
| (5) ASAK 大会派遣    | 0             |  |
| (6) OAH 年次大会派遣   | 400,000       |  |
| (7) 海外渡航奨励金      | 540,000       |  |
| 03) 年報刊行費        | 1,850,000     |  |
| (1) 年報編集委員会費     | 200,000       |  |
| (2) 年報印刷費        | 1,200,000     |  |
| (3) 年報郵送通信費・雑費   | 300,000       |  |
| (4) JSTAGE 公開費   | 150,000       |  |
| 04) 英文ジャーナル刊行費   | 1,950,000     |  |
| (1) 英文編集委員会費     | 200,000       |  |
| (2) 英文印刷費        | 1,000,000     |  |
| (3) 英文郵送通信費・雑費   | 150,000       |  |
| (4) コピーエディター雑費   | 600,000       |  |
| 05) 会報刊行費        | 700,000       |  |
| (1) 会報印刷費        | 300,000       |  |
| (2) 会報郵送通信費      | 400,000       |  |
| 06) 清水博賞委員会費     | 300,000       |  |
| 07) 斎藤眞賞委員会費     | 150,000       |  |
| 08) 中原伸之賞委員会費    | 150,000       |  |
| 09) 研究教育支援費      | 150,000       |  |
| 10) 研究事業予備費      | 100,000       |  |
| 小計 (B)           | 14,500,000    |  |

|               |             |  |
|---------------|-------------|--|
| 当期収支差額 (A-B)  | ▲ 1,050,000 |  |
| 前期繰越金 (C)     | 24,024,530  |  |
| 次期繰越金 (A-B+C) | 22,974,530  |  |

伊藤詔子・中野博文・肥後本芳男 編著  
『アメリカ研究の現在地—危機と再生』

(彩流社, 2023年, 3,850円)

中・四国アメリカ学会創立50周年を記念して編まれた本書は、歴史、文学、政治など多岐にわたる分野の論文17編と9つのコラムおよび序論から成り、総勢27名の執筆者が名を連ねる。以下に記す通り、実に学際色豊かな論集となっている。

第Ⅰ部「アメリカ研究の原点と現在」では、肥後本論文がアメリカ革命史研究の変遷を辿り、過度な修正主義に陥る現在の研究傾向に警鐘を鳴らす。横山論文はアメリカ・ポピュリズム研究が時代ごとの政治状況と複雑に絡み合う様子を活写し、辻論文はポー、ホーソーン、メルヴィル作品に潜む先住民・黒人による白人への復讐劇というサブプロットを読み取る。

第Ⅱ部「『アメリカの世紀』の誕生と衰退」では、山本論文がアメリカの長老派の歴史を紐解き、長老派内の人間観と米外交の諸姿勢との間に相関関係を見出す。続く城戸論文は、マシーセンの「アメリカン・ルネサンス」を19世紀以来の米文学批評の延長線上に位置づける。冷戦期アメリカの対独政策に着目する倉科論文は、米政府の「ドイツ問題」への対応が及ぼした欧州国際関係への影響を論じ、上西論文はフィッツジェラルド作品の仕事描写から、資本主義と人間との関係を思索する。

第Ⅲ部「トランスナショナルな核の遺産—文学、思想、環境」では、ゴーマン論文がナオミ・ヒラハラ作品における婦米被爆者のトラウマの物語を読み解き、森口(土屋)論文は、1958年の放射性降下物訴訟が、女性運動や日本の漁業者の労働運動など多様な社会運動が交差する場であったことを論証する。そして松永論文は2つのドキュメンタリー映画を分析し、核廃棄物を巡る(不)可視性の問題を考察する。

第Ⅳ部「ボーダーランズからアメリカを問う」では、岩崎論文がボーダーランズという研究視座より米加国境域の先住民史に光を当て、次いで塩田論文が二つの「エコトピア」物語の比較から西部史観・西部文学の変移を見出す。渡邊論文は、ニーナ・ルヴォワール作品における階級・人種・ジェンダーが交差する境界表象を論じ、日本での『若草物語』受容史を辿る本岡論文は、翻案により文化的境界線が引かれる過程を明らかにする。

本書を締めくくる第Ⅴ部「ポスト・グローバル世界と超域アメリカ研究」では、田中久男論文が、南部連合の記念碑建立の思想的背景および公共空間における慰霊について考察する。続く伊藤論文は、ソローの「市民の不服従」が現在の環境文学にどのように波及しているのか論ずる。最終章の田中きく代論文は、海のリテラシー概念を導入し、海の歴史という新たな研究領域の可能性を示す。

本書は、現在のアメリカ研究の動向について幅広く学ぶ上で非常に有益な書であるだけでなく、学会という学術研究の場が存続することの重要性を読者に強く実感させる一冊と言える。 本田安都子(福井大学)

松本悠子 著

『戦場に忘れられた人々

——人種とジェンダーの大戦史』

(京都大学学術出版会, 2024年, 4,180円)

「戦場に忘れられた人々」とは、第一次世界大戦中に動員され、戦闘部隊の後方で各種の労働に従事した者たちを指す。彼らは人目を引く存在ではなく、歴史学の視座からも抜け落ちてきた。本書は、英仏米政府によって主として労働要員としてフランスの戦場に集められた人々の経験を中心に据えた、「戦場の社会史」である。

従軍労働者の多くはヨーロッパ人にとって人種的他者だった。英仏は各々の植民地住民を動員して各地の戦場に派遣した。「銃後」の研究が焦点化する女性労働者と違い、彼らはみな男性だった。米政府もヨーロッパ戦線に送ったアフリカ系アメリカ人の大半を労働任務に割り当てた。植民地の「原住民」やアメリカ黒人、徴用された数十万人の中国人、戦場の現地の住民を含むヨーロッパ「白人」たちは、大戦がなければ出会えなかった人々だ。この大戦が、言語、文化、肌の色の異なる人々の接触・衝突・親密性形成が生じる空間を提供したのである。

人種は、これらの人々の戦争生活のあらゆる局面を規定した。ただし、人種主義の表出の仕方は各国で微妙に異なる。英軍が有色人種は「近代戦闘に向かない」との理由でヨーロッパ戦線での戦闘任務から排除した一方で、仏軍はセネガル兵を「戦闘に適している人種」と分類して前線に配置している。

また、英仏米軍はいずれも、動員された人々同士、また彼らとヨーロッパ人との接触を厳格に管理した。特に注力したのが、フランス人女性と「黒人」たちの接触防止だ。その背景には、逸脱した性欲や攻撃性を持つ有色の者たちから白人中上流階級女性を防衛するという、人種化・ジェンダー化された認識が存在した。また、戦後の植民地統治の継続性を睨んだうえでの判断でもあった。

米国は「黒人」をとりわけ徹底して管理し、その厳密さを英仏にも要求した。米国の人種隔離政策は、戦時にヨーロッパに拡張されたのである。だが、徹底管理にもかかわらず、異なる出自をもつ者たちは、宿营地、工場、病院、カフェやレストラン、または売春宿で出会い、衝突し、ときに親密な関係が生じた。こういった空間は、人種越境の場であると同時に、既存の人種・ジェンダー秩序を一層強化する場ともなった。

人種は戦没者の埋葬も規定した。植民地出身者は戦没者の追悼の「平等性」原則から抜け落ちている。一方で、この大戦は戦没者の埋葬の歴史の画期ともなった。英仏米がフランスの戦場で多くの兵士を弔ったがために、埋葬の方法が伝播したからだ。このとき、戦死者を個別に埋葬する方法が定着しただけでなく、アメリカ発の「無名兵士」の埋葬が英仏でも採用されている。

膨大な二次資料と英語・フランス語の一次資料を渉猟し、また戦没者の墓地や記念碑を巡ることで展開される精緻な記述が、本書の大胆な構想を支えている。本書は、戦争の社会史、人の移動史、戦没者の記念、人種・ジェンダー関係史等、多面的な領域で重要な研究となろう。

佐藤雅哉(愛知県立大学)

小檜山ルイ 著

『明治の「新しい女」——佐々城豊寿と娘・信子』  
(勁草書房, 2023年, 5,500円)

本書は、東京婦人矯風会(現・日本キリスト教婦人矯風会)の活動で知られた佐々城豊寿(1853-1901)とその娘、信子(1878-1949)の生涯を追いつつ、ジェンダーの視点から激動の幕末～明治日本社会への理解を深めるものだ。仙台藩の儒者の家に生まれた後の豊寿は、才気を見込まれ「男のように」自由に育てられたという(1章)。1872年ごろから横浜の「ミス・キダーの学校」(現・フェリス女学院)でアメリカ人女性宣教師から学び、一時東京女子師範学校で教えた。妻子ある医師の佐々城本文との恋愛の末に信子を産み、結婚後洗礼を受けた豊寿は、矯風会を中心にキリスト教社会改革組織で八面六臂の活躍をする(2,3章)。一時は北海道開拓を志すが成果を出せず(4章)、夫の死後2ヶ月余りで没している(5章)。この精神的な母の薫陶を受けた信子は、国木田独歩と結婚するが短期間で離婚し(5章)、母の没後、後に有島武郎が『或る女』として小説化した恋愛スキャンダルの渦中の人として、非難と注目を浴びる(エピソード)。これは平坦ではない道を誇り高く歩んだ興味深い母娘の評伝であるのと同時に、彼女たちの生き様がいかにアメリカのキリスト教に影響を受け、国境を越えたネットワークの中で形成されていたかを描き出す、グローバル・ヒストリーでもある。

本書は雑誌『キリスト教文化』の連載を下敷きしているが、この研究の意義をより広い視点で見ると、同著者の『アメリカ婦人宣教師一來日の背景とその影響』(東京大学出版会, 1992年)を読み返すと良い。明治期のアメリカ婦人宣教師を対象とする研究だが、終章では彼女らが育んだ「果実」として、作家や教育者として知られる若松賤子や矢島楯子と共に、佐々城豊寿が取り上げられている。合わせて読めば、女性が大きな役割を担ったアメリカ海外伝道事業のダイナミクスを、日米双方の文脈から理解できる。

後世に知られる著作や大きな肩書がなく、その意味で「果実」の中でも目立たない豊寿に、本書が焦点を当てたのはなぜだろうか。それは当時の女性宣教師たちが教育を通じて伝えようとした、クリスチャン・ホームの運営を担い、夫と子を道徳的に導き、そのキリスト教的道徳性を根拠に社会改革に取り組むアメリカの主婦を理想とする「あるべき女性像」を、豊寿が最もよく体現していたからではないか。ジェンダー平等を求める主張の激しさや急進性、周囲との対立等のアグレッシブさが取沙汰される一方、豊寿は家政能力を重んじ、西洋式の料理や裁縫も行い、女主人として家庭を社交の場とする「もてなし」もこなした。それは「正しく、女性宣教師による教育の成果というべき」もので、文明を担う当時最先端の女性の知であった。本書が描くのは、この「新しい女」の知をもって世界と向き合った豊寿と、母からその精神を引き継いだ信子の姿、そこから見えてくる「文明化」「国民化」「帝国化」のうねりの中で激しく揺れ動く明治日本社会である。

砂田恵理加(国士舘大学)

加治屋健司 著

『絵画の解放  
——カラーフィールド絵画と20世紀アメリカ文化』  
(東京大学出版会, 2023年, 6,270円)

待ちわびていた研究書がついに出版された。本書は本邦初のカラーフィールド絵画に関する専門書で、ニューヨーク大学美術研究所に提出された博士論文が原型となっている。カラーフィールド絵画とは、大きなキャンヴァスに主に単色または少数の色によって構成される抽象絵画である。アメリカ美術において初めて国際的に注目された抽象表現主義の後続絵画とされ、1950年代に登場し60年代に興隆した。

60年代のアメリカは、継承、反発を含め抽象表現主義を起点に、カラーフィールド絵画、ポップ・アート、オブ・アート、ミニマル・アートなど多様な美術が生まれた時代だが、カラーフィールド絵画は、批評家クレメント・グリーンバーグとの関係によって発展したとされてきた。フォーマリズムの観点からモダニズム美術批評を展開したグリーンバーグは、戦後のアメリカ美術の展開に貢献し、彼に追随する多くの批評家が生まれた。しかし、形式分析を重視するモダニズム批評の限界や理論の揺らぎが批判され、60年代後半に退潮し、カラーフィールド絵画の存在感も薄れていく。著者は、モダニズム批評の再検討に加え、十分なされてこなかった当時のモダニズムの美術評や作家達の言説を精緻に検証し、カラーフィールド絵画をより広い文脈の中で考察することで再解釈を試みる。考察の軸となるのは、ヘレン・フランケンサラー、モーリス・ルイス、ケネス・ノーランド、ジュールズ・オリツキー、フランク・ステラの5人だ。

著者はモダニズム批評の分析の中で、教導的立場にあると思われていたグリーンバーグが、フランケンサラーのポロック解釈に影響を受け、視覚的イリュージョンの概念を発展させたことを明らかにし、画家と批評家、画家と先行世代との双方向な関係を提示する。モダニズム批評以外の言説からの考察では、モダニズム批評が批判したミニマル・アートとカラーフィールド絵画に「非コンポジション」「演繹的構造」の共通性があったこと、当時の商業イメージとの関連からポップ・アートに先駆けて大衆文化と結びついていたことなど重要な指摘が続き、同時代の美術や文化との豊かな受容関係が明らかにされる。その一方で、これらの言説がモダニズム批評への批判的応答から生まれたことを考えれば、改めてモダニズムが果たした役割についても考えさせられる。加えて意義深いのは、カラーフィールド絵画をインテリア・デザインの視点で論じた点だ。主題よりもモダニズムが提唱するより純粋な視覚性や絵画の自律性が追求された結果、カラーフィールド絵画はグリーンバーグが批判した大衆文化「キッチュ」なものへと擬態され協働関係を結ぶことになる。

文化的状況をとりまく広範な言説とイメージを精査し、モダニズムの教義から絵画の解放を試みる本書は、カラーフィールド絵画のみならず、戦後アメリカ美術の動向と文化の中で生まれた創造的営為を照射する1冊である。

芦田彩葵(神戸大学大学院研究員/  
ニューヨーク大学美術研究所客員研究員)

## アメリカ学会清水博賞第 29 回受賞作品と第 30 回公募のお知らせ

アメリカ学会では、1996 年度から故清水博会員および同夫人からの寄付金を基金として、「アメリカ学会 清水博賞」を設けています。この賞は、主として若手研究者が最初に発表した研究成果の中から、特に優れた作品を毎年数点程度選び、賞状と賞金 5 万円を贈るものです。

第 29 回清水博賞候補作として、2023 年 1 月 1 日から 12 月 31 日までの期間に出版された著書のなかから、4 点の作品の推薦（自薦・他薦）が寄せられました。厳正な審査の結果、今回は「受賞者なし」となりましたことをご報告いたします。推薦および審査にご協力いただきました会員の皆様に感謝申し上げます。

第 30 回清水博賞選考委員会は、2024 年 1 月 1 日から 12 月 31 日までに出版される作品について、会員諸氏からの積極的な推薦（自薦・他薦）をお願いいたします。推薦作品の書誌情報を、学会ホームページの「お問い合わせ・応募フォーム」よりお送り下さい（宛先のプルダウンリストより、「清水博賞」をお選び下さい）。締切は 2025 年 1 月 8 日（水曜日）です。皆様からのご応募をお待ちしております。

清水博賞選考委員会

## アメリカ学会斎藤眞賞第 8 回受賞作品について

「アメリカ学会斎藤眞賞」は、故斎藤眞会員のご遺族からの寄付金を基金として、2009 年度から設けられました。同賞は授賞を隔年とし、その直近 2 年間の『アメリカ研究』および *The Japanese Journal of American Studies*（英文ジャーナル）に掲載された論文のなかから、若手による優秀な作品に、賞金 3 万円と賞状を贈るものです。第 8 回アメリカ学会斎藤眞賞は、『アメリカ研究』56, 55 号、*The Japanese Journal of American Studies*, Nos. 32, 34 に掲載された計 32 本の論文を審査対象とし、二段階にわたる厳正な審査の結果、次の二作品が受賞されました。

### 第 8 回受賞作品

大鳥由香子「UAMs の創出—1907 年移民法と「保護者帯同の原則」の法制化」『アメリカ研究』第 57 号（2023）

Yuki Oda（小田悠生）“Family Unity and “Noncitizen Citizenship” : The Advocacy of the International Institutes on Behalf of Separated Families” *The Japanese Journal of American Studies* 34（2023）

斎藤眞賞選考委員会

## アメリカ学会中原伸之賞第 5 回審査結果のお知らせと第 6 回公募のお知らせ

アメリカ学会では、故・中原伸之氏（公益財団法人アメリカ研究振興会理事長などを歴任）からの個人寄付金を基金とし、2019 年度から「アメリカ学会 中原伸之賞」を設けています。この賞は、本学会員の第 2 作以降の単著（年齢制限なし）ないしは本学会員の最初の単著（この場合のみ出版時 50 歳以上であること）のなかから、日本、アメリカ、あるいは世界のアメリカ研究の水準を高めることに貢献できる、深い知見と新しい視座を提供する特に優れた研究書に、賞状と賞金 5 万円を贈るものです。2023 年 1 月 1 日から 12 月 31 日の期間に出版された著作のなかから、自薦・他薦で寄せられた作品を厳正に審査した結果、次の作品が受賞作となりました。

### 第 5 回受賞作品

青野利彦（一橋大学）

『冷戦史（上）第二次世界大戦終結からキューバ危機まで』（中公新書）

『冷戦史（下）ベトナム戦争からソ連崩壊まで』（中公新書）

また、第 6 回中原伸之賞選考委員会は、2024 年 1 月 1 日～12 月 31 日に出版される作品について、会員のみなさんからの積極的な推薦（自薦・他薦）を受け付けます。推薦をいただく場合には、2025 年 1 月 8 日（水）までに、400 字程度の推薦理由（書式自由）を添えて学会ホームページの「お問合せ・応募」フォームよりご応募ください。自薦の場合は 3 冊のご献本を学会事務局に郵送でお願い申し上げます（他薦の場合にも可能ならご献本をお願い申し上げます）。学会事務局は次の通りです。

〒550-0001 大阪市西区土佐堀 1 丁目 4-8 日栄ビル 703A あゆみコーポレーション内アメリカ学会「中原賞選考委員会」

中原伸之賞選考委員会

## 英文ジャーナル編集委員会からのお知らせ

### 〈英文書誌投稿についてのお知らせ〉

本会会員が2023年1月～12月に出版した英語著作、英語論文（博士論文を含む）に関する情報を、『英文ジャーナル（*The Japanese Journal of American Studies*）』第36号に掲載する予定です。英語で執筆された研究業績について、学会ホームページ <https://www.jaas.gr.jp/the-japanese-journal-of-american-studies.html> で示されている形式に従ってご記入のうえ、電子メール本文に貼りつけて、9月20日（金）までに学会英文ジャーナル編集委員会宛（[engjournal@jaas.gr.jp](mailto:engjournal@jaas.gr.jp)）にお送りください。指示された形式に従って原稿を作成していただきますよう、お願いいたします。なお、英文ジャーナル掲載の論文については、この英文書誌に収録しないこととなっておりますので、ご注意ください。

### 〈『英文ジャーナル（*The Japanese Journal of American Studies*）』投稿についてのお知らせ〉

第37号の特集テーマは、“Communications”です。特集テーマのほか、自由論題による投稿も受け付けます。投稿原稿応募申し込み（論文要旨）の締め切りは2025年1月12日（日）、原稿締め切りは2025年5月11日（日）です。投稿原稿応募申し込みの記載事項と申込先の詳細については、11月の会報もご覧ください。投稿者はアメリカ学会の会員に限ります。なお『アメリカ研究』との二重投稿、あるいは日本語、英語を問わず他の雑誌に発表したものと同じ内容の投稿はご遠慮ください。

英文ジャーナル編集委員会

## 新入会員（2024年5月26日現在）

|       |            |       |
|-------|------------|-------|
| 阿部幸大  | 筑波大学       | 日 化 史 |
| 加藤慶   | イリノイ大学（院）  | 地 環   |
| 藤江芽衣  | ハーバード大学（院） | 文 化   |
| 亀浦香蓮奈 | 国際基督教大学（院） | 思 宗 教 |
| 大室幸嗣  | 防衛大学校      | 社 化   |
| 池田陽子  | 昭和女子大学     | 人 社 環 |
| 小谷真由  | 神戸大学（院）    | 文 人 ジ |

（\*入会申し込み順。専門領域の略記については、PDF版会員名簿作成用アンケートおよび学会ホームページに記載されている新表記法による）

## 訃報

本合陽会員（20-21年度常務理事・年報編集委員長、東京女子大）が2024年5月1日にご逝去されました。突然のことで悲しみにたえません。本合先生はアメリカ文学、クィア批評の分野で業績を残され、2023年夏の会報212号に巻頭言をお寄せいただいたばかりでした。先生のアメリカ学会へのご貢献に感謝申し上げ、安らかな眠りにつかれますようお祈りいたします。

## 編集後記

今号から本格的に新しい年報編集委員会での会報作成が始まり、私はその担当に就任しました。そうした立場になるまで、四季の移り変わりを告げるように定期的に届くこの会報が、どのような過程で、どのような人の手を経て作られているのかを考えたこともありませんでした。このたび現体制になって初めての会報作成を無事に終え、1つの会報の作成に、理事や各委員会の先生方、新刊紹介の執筆者の方々、編集委員の皆様、これほど多くの人々が関わっていることを知り、215号まで回を重ねた会報の重みを実感し、関係各位への感謝を感じています。

今号が仕上がるまでには、新たに就任した南修平・年報編集委員長と試行錯誤の毎日でしたが、渡邊真理子・前編集委員長、梅川健・前会報担当、事務局の角田真紀さんの心強いサポートをいただきました。心からの感謝を申し上げます。（三牧聖子）

2024年7月30日 発行

アメリカ学会

〒550-0001 大阪市西区土佐堀1丁目4-8

日栄ビル703A

あゆみコーポレーション内

Tel: 06-6441-5260 Fax: 06-6441-2055

<https://www.jaas.gr.jp/>

発行人 中 嶋 啓 雄

編集人 南 修 平

印刷所 (株)国際文献社

〒162-0801 新宿区山吹町 358-5